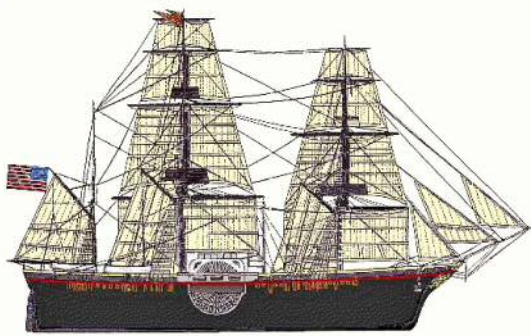




「サスケハナ号」

鉄のふしぎ?
博物館

■62

「ペリー来航」

画像はカラーと
交換しています。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

嘉永6年(1853年)

6月、ペリー率いるアメリカ東インド艦隊の軍艦4隻が最初の寄港地、那覇を後にして浦賀沖に姿を見せました。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰(じょうきせん)たった四杯で夜も眠れず」

慌てふためいた幕府の対応をユーモアたっぷりに批判した狂歌です。黒船がやってきて「泰平の眠り(鎖国)から目を覚ます(開国)ことを、か

けています。
実はこの4隻、ペリーの乗船する旗艦「サスケハナ号」と「ミシシッピ号」は帆走と外輪式蒸気機関推進併用の、3本マストの機帆船です。他の2隻「プリマス号」と「サ

維新ふるさと館に展示されている「昇平丸」

「ラトガ号」は少し小さな帆船です。船体が真っ黒に塗られた、黒船の大きさは庶民の度肝を抜くものでした。「サスケハナ号」は全長78・3尺、全幅13・7尺、吃水(水面から甲板まで)6・2尺、乗組員300人。当時、世界最高級の軍艦で、見上げるばかりの高さです。庶民がこれまで見た大きな船は千石船で全長29・4尺、全幅7・4尺ほどです。

黒船の大きさと大砲の音に驚いた幕府は8月水戸藩に、9月浦賀奉行に洋式軍艦の建造を命じました。それぞれ「旭日丸」と「鳳凰丸」で、その後9月15日には200年余り続いた、大船製造の禁を解きました。

富国強兵政策を採っていた薩摩藩主島津斉彬は、嘉永5年(1852年)に幕府に対して琉球王国の防衛を名目に建造願いを提出しました。嘉

永6年(1853年)に建造の許可が下りると、桜島の造船所で起工し、その直後にペリーが来航したのです。安政元年(1854年)12月に竣工しました。(全長31・0尺、全幅7・3尺)

この船、琉大砲船(洋式軍艦)は後に、幕府に献上されて昇平丸(しょうへいまる)と改称しました。今、模型が鹿児島市の「維新ふるさと館」に展示されています。この模型や解説図を見ると千石船に使われていた錨とは異なる、輸入品のコモンアンカーと鎖がついています。昇平丸は江戸に回航され、品川に置かれ、長崎海軍伝習所への伝習生派遣など、主として練習艦として使用されました。

江戸幕府の洋式軍艦建造命令によって日本の近代

代的造船業が急激に伸びた訳ではありません。本格的に発達し始めたのは、明治29年(1896年)に公布された「造船奨励法」および「航海奨励法」による政府の奨励策以降です。

日本の製鎖工業も、この時期に端を発しています。大阪製鎖造機の製鎖部門の前身、大阪製鎖所「古田敬徳個人経営、創業明治37年(1904年)8月、が製鎖工業の草分けです。

【参考資料】

▽「幕末千夜一夜」より借用(<http://onjweb.com/netbakunaz/essays/essays55.htm>)

▽産業フロンティア物語 製鎖・歯車(大阪製鎖造機・アイアモンド社(昭和44年))